合衆国文化人類学の形成と反セム主義

―Franz Boasと戦間期の諸状況――

Cultural Anthropology and Franz Boas in Interwar America

佐々木　　明

この小論では戦間期のアメリカで合衆国の文化人類学がFranz Boasを中心に形成された過程を特に反セム主義との関係で概観し，形成された合衆国文化人類学の一般的性格を考察する[1]。以下ではBoasと同時代的だったBoas研究者，合衆国文化人類学史を扱う研究者が，彼等の読者の当然の予備知識と考えて，彼等の文献で言及することの少ない戦間期アメリカの人種主義的状況，特に大学での反セム主義的背景をやや詳しく述べ，ユダヤ系ドイツ系[2]アメリカ人であったBoasを中心に形成された合衆国文化人類学のある種の特質を検討する。たとえば，文化人類学者にとって，イニシアルなしの"Boas"はFranz Boasを意味するが，同時代の合衆国知識人にとっては，イニシアルなしの"Boas"が，反セム主義的言動でも知られていたnativistの"Boas"[3]を意味しやすかったことなどを知るのも，合衆国文化人類学を理解する上で重要であると筆者は考える。

現代合衆国の宗教的寛容（有賀，1982；p.31）が，戦間期の屈折した諸状況の産物であることはよく知られている。現実の民族問題の影響をうけやすく，同時に現実の民族問題に影響をあたえやすい文化人類学（Service，1985；p.297）が，少なくとも一時的に人種主義の強かった戦間期の合衆国で，反人種主義的理念を守るBoas[4]を中心に形成されはじめ，やがて人種主義的圧力をおしもどしていったことは，それだけでも特筆すべき歴史的事件だった[5]。さらに，合衆国文化人類学の基本的理念であるpsychic unity[6]が20c.後半の合衆国の多民族状況の安定的継続の上での基本理念に採用されたことを考えると，戦間期の人種主義的諸状況のなかで，Boasと文化人類学がたどった過程を考察することに特別な意味があることは認められるだろう。

（Boasとユダヤ系移民：第一次大戦まで）

BoasがMindenの豊かな家庭で育ったユダヤ系ドイツ人だったことは文化人類学者の常識であり，同時代的なアメリカ人，ドイツ人は特に説明がなくてもこの事実がアメリカまたはドイツでBoasが活動した時代にもっていた意味を諒解できた。特に説明する必要がなかったのと，結果的に反セム主義を刺激するのを避け（佐藤，1985；pp.241・242），その「意味」を公言しない状況[7]がつづいたので，Boasのユダヤ系ドイツ系アメリカ人としての自覚が，Boasを中心として形成された合衆国の文化人類学に大きな影響を及ぼしたことを指摘する研究論文は長いこと出現しなかった。より異質な移民が増え，ユダヤ系であることから生じる問題が重要でなくなった（猿谷，1983；p.21）1980年代初頭になって，合衆国文化人類学の形成過程で働いたBoas個人のユダヤ認識の重要性（Glick，1982；p.546）が

始めて指摘され，Boasのユダヤ教徒としての活動が広く知られるようになった[8]。

Boasが学生から研究者へと成長する1880年代はドイツの近代的な反セム主義が形成され，悪化した時期だったので，Boasは1882年ごろから合衆国への移住を考え始めた[9]。1879—80年にやや好転した景況が再び悪化し，世界大不況が深刻化しつづけると，ドイツの反セム主義もますます激化したので，Boasの疎外感もますます強くなり（Stocking, 1968；p.150），移住の意志もますます強くなった。1886年には4年間の予定で北米西海岸の調査に出発し[10]，そのまま合衆国に事実上移住した[11]。1880年代後半に合衆国に移住したユダヤ系ドイツ人はやや少なく[12]，Boasが西ヨーロッパ諸国経由でBoasにやや遅れて渡米したロシア系ユダヤ教徒のPogrom難民を主体とする大量の東欧系ユダヤ教徒（Yiddish）と移住史上は同時代人だった（Glick, 1982；p.553）ことは，この後の展開を考えるとみのがせない[13]。

Boasの活動の拠点がYiddish移民の集中するニューヨーク[14]だったことも，Boas自身のユダヤ認識・同時代性と複合して，文化人類学とYiddish移民問題との関係を緊密化させた。Yiddish移民などの「新移民」はこの時期にはスト破りにも動員される巨大な半失業労働力プールを形成し（Schreuder, 1989；pp.133, 138），貧困から犯罪も多く[15]，教育水準もまだ低かった[16]。第一次大戦中までこの状況が続き，1917年2月21日から3月1日までは食料品値下げの大騒動があった（Frank, 1985）ほどだった[17]。Yiddish難民の与える違和感が反セム主義的感情を悪化させた点では合衆国でも（Dobkowski, 1970；pp.146—147）西ヨーロッパ諸国でも（佐々木，1990；p.61）大差がなかった。

同化が進み，社会的・経済的地位も高かった19c.中葉移住のユダヤ系ドイツ系アメリカ人は，ユダヤ系アメリカ人全般の評価の低下を恐れて，Yiddish移民の英語教育を援助し，集住地のghetto化を避けるべく，地方への分散にも援助を与えた（Bondar, 1985；p.118）。非ユダヤ系ドイツ系アメリカ人はドイツでの悪化する反セム主義の影響から，ユダヤ系ドイツ系アメリカ人への差別を強化しつつあった（Cohen, 1979；p.118）。20c.初めには良好だった[18]合衆国とドイツの関係は1910年代に入って悪化しはじめ[19]，第一次世界大戦中のドイツ系アメリカ人の圧迫にまで悪化した[20]。Boasもドイツ支持の立場をとった（Stocking, 1968；p.274）ので，第一次大戦中は微妙な位置にあった[21]。

（反セム主義運動；戦間期まで）

移民がなければ成立しなかった合衆国社会でも特定カテゴリーの移民の集中的流入があるとそのカテゴリーを対象にするxenophobiaが発生しやすい。特に戦間期前半には急成長する合衆国労働市場に大量流入した「新移民」の排斥運動が激化し（山本，1986），反セム主義運動もそれなりに強かった。形成途上にあった合衆国の文化人類学は，「100％アメリカン」を強調し，反セム主義的でもあった人種主義に対抗し，「自由で平等な合衆国らしさ」をそれなりに守ったことから，合衆国内での思想的地位を確立し，普遍性の高い研究分野としての完成度を高めていったと考えられるので，以上ではまず合衆国の反セム主義の形成過程を簡単に述べる。

ドイツでも反セム主義的差別が開始していなかった19c.中葉までに移住したユダヤ系ドイツ系住民は，非ユダヤ系ドイツ系住民と合衆国各地で混住していた（Sowell, 1981；p.77）。

植民地時代以来の多少の差別はあり（Dobkowski, 1979；p.81），南北戦争期にはGrant将軍による有名な差別事件もあったが，近代的な反セム主義宣伝は1888年までなかった（*ibid.*；p.57）[22]。1910年前後までの合衆国の反セム主義の成長を促した[23]のは，主としてStöckerを代表者とするドイツ・プロテスタント聖職者の戦闘的反セム主義だった（Cohen, 1979；pp.195, 200）。ドイツの同業者に刺激された合衆国の一部プロテスタント聖職者などの反セム主義活動家にとり，1890年代後半から1910年代にかけてのYiddish移民社会の「憂れうべき状態」はうってつけの宣伝材料だった（Dobkowski, 1979；p.63）[24]。

容疑の確定していなかった一ユダヤ系市民をリンチで殺したアトランタ事件（1913）[25]は合衆国で進行していた反セム主義宣伝実現（*ibid.*；p.189）の最悪の事例であるのと同時に，黒人系住民問題と反セム主義との関連が成立する契機になった[26]点でも重要な事件だった。第一次大戦中には，pogromの責任者であるロシア皇帝と合衆国との連合に反対するYiddish移民が反戦的言動をとりやすかったので，彼等に対する圧力が強く（*ibid*,；pp.154—155），ロシア革命後は共産主義的ユダヤ人の恐怖が宣伝され（*ibid*. pp.223～224），Yiddish移民の労働組織の活動が盛んだった（*ibid.*；pp.217～219）こともあって，「破壊分子的ユダヤ人」を標的にする反セム主義をその一部とする戦間期の人種主義複合が急速に形成された（Shaffer, 1987；p.53）。

悪名高い「議定書（protocol）」の訳本が1920年にボストンで出版され，大量に流布する（Doblowski, 1979；pp.196, 225）と，合衆国でもユダヤ系国際組織は世界征服を狙う陰謀組織とみなされはじめ（*ibid.*；p.186），国際連盟までを「ユダヤ人の陰謀」とする思想が流行した（*ibid.*；p.191）。孤立主義とxenophobiaの中で，1920年から，WASPの優位を強調し，「金持ちのユダヤ人」，急進主義者・戦闘的労働運動の指導者，黒人・カトリック教徒など攻撃する第二次Ku Klux Klan（松田，1985；pp.63・64）の活動がはじまった[27]。ユダヤ系移民の流入が続く[28]一方で，19c.末に大量流入したYiddish移民二世がよりよい雇用の前提である高等教育に進出しはじめた（佐藤，1988；p.46）ことが直接の原因になり，1923年前後からKKKの活動が大学をも攻撃目標にした（Jackson, 1967；p.170）ことが，反人種主義的な基本理念を前提とする形成期の文化人類学の直面した事態だった。

（Columbia大学と反セム主義：戦間期）

1920年代半ばのKKKの退潮期までは，Boasを中心とする形成過程の文化人類学の反人種主義的サークルは研究者のなかですら異端的存在だった。生物科学的方法を応用する形質人類学から文化人類学を切り離すBoasの基本路線は，当時の人類学者の進化論的かつ人種主義的主流からみれば，非科学的な趣味的思想とみなされがちだった（Stocking, 1968；p.289）。伝統的なWASP支配層出身で，自らの民族的帰属を強く意識していた（岩野，1988；p.73）人種主義的知識人の多かった東部の大学のなかで，背景の異なるBoasが理念の異なる文化人類学を形成しつつあったことは特異な現象だった[29]。

時代の要請に応えられない教育研究分野と伝統的支配層出身教授の多かった大学当局は反セム主義運動への態度をあいまいにしがちであり[30]，大都市では急増するYiddish二世に量的にも質的にもおされ気味だった伝統的中間層出身学生が反セム主義運動を積極的に支持しがちだった。東部大都市の大学ではYiddish二世入学者が特に多く，制限的手段をとりや

すい私立大学にはユダヤ系学生の民族別割当入学制度を採用せよとの圧力が特に強かった。民族同定の困難から割当入学制度は採用されず，ユダヤ系学生を締め出すように工夫した性格・心理テスト（Dobkowski，1979；p.158）でユダヤ系学生の急増をとめる方法が東部の有力私立大学で流行した。1923年にはHarvard・Princeton両大学にKKK支部が設立されるなど，東部でも多数の大学で学生のKKK活動が活発化しはじめた[31]。

Boasのいた Columbia大学でもユダヤ系入学者急増対策に心理テストを採用した[32]が，KKK運動の最盛期に'the least American of all schools'とKKKから非難された反・反セム主義の最後の砦になった[33]。Columbia大学でもKKK支持学生が黒人系学生追放運動を始めたが，担当学部長が追放されそうになった黒人系学生の在学を強く支持したので，それ以上には進展せず（Chalmers，1967；p.257）目立った反セム運動もなかった。KKKの浸透を阻んだ Columbia大学の評価とユダヤ系教授[34]の社会的地位はKKK運動の退潮と反人種主義的リベラリズムの復活のなかで高まり，その後の長い年月の間に合衆国文化人類学の反人種主義的理念が一般化する前提となった。

Columbia大学では反人種主義的雰囲気が維持されたが，人種主義的傾向の強かった他大学の研究者の多い人類学会でのBoasの地位はやや不安定だった。1919年12月30日にBoasはアメリカ人類学会理事を解任され，調査結果によっては学会から除名すると通告された。これらの措置は直接的にはBoasの新聞投書記事に対する学会の処分とされた[35]が，第一次世界大戦中のBoasの親独・反戦言動，ドイツ系研究者の「スパイ事件」へのBoasの「関与」などの背景があった（Stocking，1968；p.273—287）[36]。学会でのBoasの地位はKKK運動の最終局面だった1923年までに回復し（*ibid.*；p.216），Columbia大学がKKKの圧力をおしきった段階では，Boasの学会での地位は反人種主義的な文化人類学を全国的に発展させられる状態になった。

1924年の割当移民法成立後に第二次KKKの活動が鎮静化した後には，Columbia大学もBoas個人も人種主義的攻撃にさらされることがなかった。1933年直後に，ナチスの影響の強い反セム主義団体の設立が続出し，1935年のニューヨークのハーレムの人種暴動でユダヤ系住民が攻撃された時期にも，反セム主義的攻撃は一般化しなかった。Boasの熱心な反ナチ的言論活動[37]に対しても合衆国国内では大きな妨害はなく，第二次世界大戦開始後もドイツに対するアメリカ人の感情は全般にやや好意的だった[38]から，第一次世界大戦前後のようにこの面でBoasが悩まされることもなかった。Columbia大学の反人種主義的方針も維持され，1933年にドイツ知識人の大量亡命が始まると，ユダヤ系，急進主義者をとわずうけいれた。特にドイツにあった時代にゾルゲ事件のR. Sorgeが所長秘書として所属していた（Feuer，1982；p.167）ことのあるMarxist集団のFrankfuhrt Instituteをまるごとうけいれた[39]のは，近代社会科学史上の一大「快挙」だった。

（文化人類学のアメリカらしさ）

1920年代前半には60歳代中葉だったBoasを中心にnativismを克服して形成された合衆国文化人類学は，合衆国以外の諸国には似た分野がない点で"100% American"な研究分野となった。指導的研究者の少なからぬ部分がユダヤ系だった点でも文化人類学は現代アメリカ知的活動の一般的パターン（本間，1988；p.19）にあてはまり，進化論的で古文献学的な

19c.のイギリス人類学の否定を前提としていた点でも，ヴィクトリア文化への挑戦から出発した現代アメリカ文化（本間，1978；pp.15—16）の好例であり，ユダヤ系知識人のリベラリズム（Lerner，1989；p.349）を実現した典型例であるようにみえる。

しかし，合衆国文化人類学は第一次世界大戦前から形成されはじめ，1920年前半にはほぼ完成していたから，ユダヤ系知識人による脱英国的な文化活動としては成立がやや早いように感じられる[40]。だから，その形成過程でユダヤ系研究者（Boas）が指導的立場にあったことと，その内容が反ヴィクトリア朝的であったことから，文化人類学を現代アメリカ文化の一般カテゴリーにあてはめるのは妥当ではないだろう。Boasのリベラリズムと反進化主義は，Boasがユダヤ系アメリカ人であることと特に強く関係せず，19c.末からの合衆国文化の脱英国的傾向とは全く無縁に，Boasが教育をうけた第二帝政期ドイツで形成され，Boasの合衆国移住により，合衆国に「移植」され，合衆国の条件で「成長」したとみるのが正しいだろう。

Boasのリベラリズムと反進化主義を，Boasを指導し，進化論的でないドイツ文化人類学を創設しようとしたR. Virchowの影響に求めるのがこの小論の基本的な見解である[41]。よく知られているように，BoasはVirchowへの尊敬の念を長い間維持し，著作のなかでもVirchowにしばしば言及した[42]。よく知られていないのは，Virchowが偉大な病理学者であり，優れた自然人類学者であって，自由主義的な大政治家であったのと同時に，ドイツの先史学と民族学の事実上の創始者であり，しかもpsychic unityに基づく反人種主義的な文化人類学の創始者であったこと，およびVirchowが創設し（ようとし）た文化人類学がVirchowの在命中から反自由化，保守化しつつあったドイツで「不毛化」した（佐々木，1991）ことである。

Boasの多様な活動の「原形」がVirchowの活動にあることは，もっと知られてよいだろう。Virchowの先行性が最も明白なのは自然人類学的分野である[43]が，社会教育活動でも[44]，反セム主義に対する活動でも[45]，両者の共通性が強く，直接指導をうけた4年間の影響には帰せられないほどの人格的影響力をVirchowがBoasに及ぼしていたことがわかる[46]。文化人類学でも理論構築よりも民族誌調査による事実発見の努力を尊重する姿勢をVirchowから学んだことをBoas自身が認めていた（Harris，1969；p.257）[47]。'Culture'を人類学の一般用語に採用したのも，Boasの業績とする（Abe，1988，p.59）よりは，ドイツ文化人類学，窮極的にはVirchowの功績とすべきである（佐々木，1991；p.48）。

Virchowが進化主義な立場をとらなかった（*ibid.*；p.53（20））から，Boasの反進化主義もVirchowの延長とみることもできよう。しかし，合衆国文化人類学の反進化主義は合衆国の環境の中ではもっと複雑な意味をもっていた。19c.のイギリス人類学の進化論図式の否定は合衆国文化人類学の大きな課題であったのと同時に，ユダヤ系研究者にとっては極めて微妙なテーマである[48]。やはりユダヤ系研究者だったR. Lowieが進化論図式を否定したnegative anthropology（Serivce，1985；p.190）の中心的人物だったことを考えると，反進化主義に創世記宗教の弁護[8]，合衆国fundamentalismへの譲歩[49]などの側面があることを感じるのは必ずしも過敏ではないかもしれない[50]。

BoasとBoasの教育した一群の研究者の基本思想が合衆国，さらに世界の民族政策に与

えた有益で巨大な効果を現代人は無視できないが，この思想は歴史的には「不毛化」したドイツ文化人類学の延長である（佐々木，1991；p.51）[51]。本論でもそうしたように，Boasを合衆国文化人類学の創始者とするのは一般的慣行だが，Boasの考えていた方向で研究を進めている現代合衆国の文化人類学者は必ずしも多数派ではないから，Boasの創設者的性格を強調するのは，ドイツの文化人類学が挫折したので，Virchow-Boas風の文化人類学が「合衆国以外のどこにもない」点で特にアメリカ的とみなされていることを示唆するにすぎないとも考えられる。

政治家でもあったVirchowの文化人類学の政治的側面に注目すれば，やはり政治的志向のあったBoasが，戦間期合衆国の人種主義的状況のなかで，Virchowの文化人類学を「アメリカらしい文化人類学」に成長させたとみることもできよう。しかし，Virchow-Boas路線の文化人類学はpsychic unityを基本とする人間に関する諸科学の一つであり，本来特に合衆国的な，またはその他のナショナリスティックな属性をもたないはずである。だから，合衆国の文化人類学はBoasの指導した研究者が再三強調したように，Boasが確立した事実発見的科学とみるのがより正確なのかもしれない。

（註）

(1) このテーマをBoas自身の大量の著作と，同様に大量のBoas研究文献を駆使して考察するのは不可能に近いので，考察を限定せざるをえない。

(2) ややわかりにくい表現だが，教育をうけたドイツではユダヤ系とみなされ，成長してから移住した合衆国市民をさす。

(3) Ralph Boas（1887—1945）。（非ユダヤ系）オーストリア系二世で，Harvard他各地の大学で英語を教え，特に外国人移民の英語教育方法を改善したことが広く知られていた。1925年に結成したThe School and College Conference in Englishを通じて，東部の高校・大学の英語教育に大きな影響を及ぼした（Dobkowski，1979；pp.102，227）。

(4) Boasが熱心な反人種主義活動家でもあったことは文化人類学史以外の分野でもよく知られている（Dobkowski，1979；p.3，森田，1987；p.104）。文化人類学史上では人種主義傾向の強かったC. Wisslerとの反目が特に著名である（Service，1985；p.248）。

(5) （大日本帝国を含む）全体主義的諸国の人類学的研究が人種主義的傾向を強めて，科学的研究から逸脱していった（Harris，1969；p.251）ことを考えると，この歴史的事件はさらに高く評価できるだろう。

(6) Boasは'human mentality'［mentality common to all human beingsの意だろう］をpsychic unityとほぼ同義に用いた（Service，1985；p.260）。Psychic unityと同義のElementärgedankenを基本理念とする姿勢はBoasの研究・活動を一貫していた（Leaf，1979；p.200）が，用語の統一がないので，この概念に関する予備知識の少ない研究者には，Boasの意図の理解がやや困難らしい（たとえばAbe，1988；p.60）。

(7) Boasが自らをユダヤ系ドイツ系アメリカ人ではなく，ドイツ系アメリカ人であると強調していた（Glick，1982；p.554）ことはよく知られている。Jessup調査団の一員だった民族学者D. Laufer がユダヤ系ドイツ人であることを公表しないようにBoasが強く働きかけた（Freed et al.，1988；p.13）ことも，この状況をよく反映している。

(8) 合衆国移住後は改革派ユダヤ教会に所属し，reformistとしてロンドンに講演旅行するなどの

活動をしていた（Glick, 1982；pp.555, 556）。創世記の記述も尊重していたことは自明だから，Boas の反進化主義もこれまでとは異なる角度から再検討すべきであることがわかるだろう。

(9) ドイツ国内では積極的に研究を続けてもユダヤ系研究者には適当な職が与えられない慣行があった。Boas はおじの Abraham Jacobi の紹介で，合衆国の適当な大学に適当なポストを探すことを考えていた（Stocking, 1968；pp.137—138）。A, Jacobi は1848年の革命時に投獄された後，1851年にニューヨークに移住し，合衆国最初の小児科教授になっていた。

(10) この年には当時のドイツでユダヤ系研究者が新任される際の最高の職であるベルリン大学講師（自然地理学）に任ぜられたが，全く関心を示さず，着任記念講義もしないまま，合衆国に出発した。

(11) Bastian が北米北西海岸調査に反対した（Stocking, 1968；p.153）のは，この話が出た当初から，Boas の移住の決意がわかっていたからなのだろう。Bastian とならんで，Boas のドイツでの最後の数年間を指導した Virchow の態度を記述した文献はないが，合衆国移住後の Boas の Virchow に関する好意的言及とのユダヤ系研究者に対する Virchow の想定される同情的態度（佐々木，1991；p.49）から，Virchow が強く慰留しなかったことだけは断言できるだろう。

(12) A, Jacobi と同じく，1848年の革命後に移住した自由主義者が多く，Boas と同世代のユダヤ系ドイツ系アメリカ人には二世が多かった。

(13) 本文で述べるように，合衆国の文化人類学が，Yiddish 移民の同化および社会的・経済的上昇過程での諸問題を解決する過程と並行して形成されたとしても誤りではない。現実の民族問題との feedback から，人類的普遍性のある合衆国文化人類学が形成されたとも表現できよう。Yiddish を含む「新移民」には出稼的性格がやや強く，帰化率は全般的には「旧移民」より低かったが，送出国での迫害が原因で移住した Yiddish の帰化率は相対的に高かった（岩野，1982；p.108）ので，新移民問題に占める Yiddish 問題の比重も大きかった。

(14) 1880年に約 8 万人（ドイツ系が主体）だったニューヨークのユダヤ系住民は，1920年代初頭には約150万人に達し，全市人口の約¼を占めた（Shaffer, 1987；p. 50）。

(15) 1908年の犯罪件数に占める Yiddish による犯罪件数の割り合いは約50％で，人口比の 2 倍に達した（Dobkowski, 1979；p.42）。

(16) 平均的就学年齢よりも年上の就学者の比率がイタリア系住民に次いで多かった（Bondar, 1985；p.196）。

(17) このあと，大学入学者の占める Yiddish 移民の比率が高くなるまで，Yiddish 移民問題が重大化しなかったことから考えると，第一次世界大戦の戦争景気で Yiddish 移民の生活水準も急上昇したと判断できる。

(18) 1905年の第一次モロッコ事件ではルーズヴェルト大統領が調停に動くなど，米独両国の緊密な関係が目立った。

(19) 1911年に始まったメキシコ革命にドイツ帝国が干渉しようとしたことが悪化の直接の原因である。

(20) 合衆国参戦後の1917・18両年の反ドイツ感情は激しく，ドイツ語図書・雑誌の処分，ドイツ語教育の放棄，ドイツ系新聞のボイコット，ドイツ音楽の忌避などがおき，ドイツ式姓名を英語風に改変するドイツ系アメリカ人もいた（Sowell, 1981；p.65）。

(21) Boas の教えていた Columbia 大学では第一次世界大戦中に反戦教授を追放した（Shaffer, 1987；p.53）が，Boas が在職しつづけたことからも，Boas の親独的反戦感情に多少は「おつきあい」的な色彩——ユダヤ系であるよりは，ドイツ系であることを強調する目的——があったことを指摘できるだろう。

(22) 1886年に Apache の指導者 Jeronimo が降伏して Native American の組織的抵抗が終了し，

1890年の Wounded Knee での収容中300名の Hsu の大虐殺により，国内に武装抵抗できる「異民族」がいなくなった時点（猿谷，1981；p.35）で反セム主義運動が始まったのは単なる偶然ではないだろう。

(23) 1895年の合衆国政府の財政危機をユダヤ系金融機関の責任に転嫁させようとした宣伝（Dokowski，1979；p.179）も反セム主義の成長を助けた。

(24) この期以降に流布した三文小説，マンガ雑誌の反セム主義的記事は，中世的反ユダヤ主義を延長した単純な商業的産物だったが，反セム主義的感情を強化していった（Dobkowski，1979；pp.50—51, 59）。

(25) 佐藤，1988；pp. 45—46。この事件の背景にはニューヨークと同様にアトランタ等の南部大都市でも Yiddish 移民が急増し，反セム感情が高まっていたことがある（佐藤，1985；p.33）。Yiddish 移民が南部の強度の差別に苦しんでいた黒人系住民に同情したのが南部の反セム主義の原因である（Cruse，1987；p.135，佐藤，1985；pp.34, 35）とするのが通説だが，一般に差別事件では被差別側の言動よりも差別側の言動が決定要因として重要だから，被差別側の Yiddish 移民の能動的行動を強調するのは妥当でないだろう。

(26) アトランタ事件に関する最高裁判所の意見が1919年の黒人系殺人容疑者の裁判で被告に有利に働いたことから，アトランタ事件の弁護士だった Marshall (The American Jewish Committee の創始者）が North American Association for Coloured People の役員に招かれたことが両者の連関が形成される直接の契機だったが，Marshall の活動は法的事項の助言に限られた（Cruse，1987；p.119）。人種主義者にとっては世界征服を狙う「ユダヤ人」が合衆国の無知な黒人をだきこむ策動であり，これ以降黒人と「ユダヤ人」が一体的な攻撃対象になった。

(27) KKK の活動に比べれば，Henry Ford の反セム主義運動は有名だが，単なるエピソードにすぎない。

(28) 第一次大戦終了前後の東ヨーロッパでの革命・国境変更・新国家独立・クーデターなどが，1920年以降も大量の難民，とくに急進的思想をもつユダヤ系中間層移住者を合衆国に送りつづけた。

(29) 旧支配層スタッフの抱いていたユダヤ系アメリカ人のイメージはもともと特に反セム主義的ではなかったが，旧支配層の支配的影響力が弱まるにつれて，戦闘的反セム主義の方向に若干傾いた（Dobkowski，1979；p.115）。この当時は，（形質）人類学者はもちろん，大部分の社会科学者も明確な人種主義者であり（猿谷，1981；pp.44, 45），Boas が一時所属した American Museum of Natural History も，1918年3月に設立され，native American の参加のみを認めた人種主義的研究団体だった Galton Society of New York（Stocking，1968；p.289）との関係を強化しつつあり，人種主義的色彩が濃厚になっていた（Ross，1985；p.392）。

(30) 反セム主義宣伝に積極的に加担した有力教授も少なくなかった。Stanford 大学の学長だった D. S. Jordan（1912 *Unseen Empire* で国際ユダヤ組織の世界征服陰謀を主張した）はその好例である（Dobkowski，1979；pp.189—190）。

(31) KKK の大学内活動の中心は Chicago 大学にあり，KKK に対する伝統的忌避感情の強かった東部の大学への浸透はやや遅れた。

(32) 1916年にはおおむね10％以下だった（Kessner，1977；p.98）ユダヤ系入学者は，1920年に40％に達したが，心理テスト導入後の1921年には20％に激減した（Dobkowski，1979；p.158）。

(33) 当時の college song で

Oh, Harvard's run by millionaires,
And Yale is run by booze,
Cornell is run by farmers' sons,

Columbia's run by Jews,

⋮

と歌われた（Dobkowski, 1979；p.157）。Yale大学の'booze'がColumbia大学の'Jews'をひき出す目的で選ばれており，後者を強く意識した歌詞であることは明白だろう。

(34) ユダヤ系教授は1924年にはChicago・California・Michigan・Detroit・Winsconsin・Clark・George Washington・Harvard・New York City College・Yale・Smith各大学にいた（Cruse, 1987；p.143）からBoas達が例外的だったのではないが，Columbia大学はユダヤ系関係者が大学全体の運営に関して発言権を行使できた点で例外的だった。

(35) 12月29日の *The Nation* 紙上でBoasがラテンアメリカの調査者である人類学者（Boasは実名をあげなかった）を政府の「スパイ」であるとして攻撃した記事が直接の原因である。上記の処分の他に，National Research Councilの委員を解任され，学会総会での抗弁も禁止された。

(36) 学会を開催したHarvardの進化論的でやや人種主義的な研究者，その背後にあって19c.の合衆国民族学を継承していた政府関係者などからなるワシントン系のnativisticな人類学者がBoasの「危機」のシナリオをつくった。

(37) 1933年のHitlerの首相指名時にはHindenburg大統領に公開質問状を送付し，反人種主義的な *Aryan and Nonaryan* を発表した。後者はまずドイツ語で出版され，直ちに英語とスペイン語に翻訳されて，1934年には増刷され，1945年までに版を重ね，Boasの著作のなかではもっともポピュラーだった（Glick, 1982；p.559）。第二次大戦前にはMalinowskiも反ナチス的著作を発表した（Whitfield, 1980；p.5）。

(38) 「日本人」・ナチスの評価が1932年以降急激に悪化したのとは対照的に，ナチスとは区別された「ドイツ人」（Sowell, 1981；p.67）の評価は大きくかわらなかった（Remmers & Wood, 1988；pp.403〜404（fig.1），405（fig.2），406〜407（fig.4））。

(39) Columbia大学は同研究所がMarxist集団であることを充分認識しないでうけいれを決定し，研究所側も大学が困惑しないようにマルクス主義的言動を控えた（Coser, 1984；p.93）。ドイツに残った設立者の財団から巨額の運営資金が供給されたので，大学は構内の一隅を貸しただけだった（Feuer, 1982；pp.173—174）。文化人類学に関係の深い分野には経済（人類）学者K. Polany（Columbia大学でも教えた。夫人が元ハンガリー共産党員だったので合衆国に入国できずカナダに住んだので，ニューヨークに通勤した），中国史学者K. Wittfogel（Columbia大学に定着し，Rockfeller財団の援助で研究を進めた）がいた。

(40) 1920年代前半には合衆国の高等教育に大量進出したユダヤ系住民の最初の世代はまだ学生（主に学部学生）であり，合衆国外で高等教育をうけてから移住した亡命知識人も少数だったから，合衆国文化人類学の形成期からつづく諸特質を一般的なユダヤ系知識人の活動の結果と考えるのは妥当ではない。

(41) やや特殊な組み合わせであるリベラリズムと反進化主義の源泉がBoasの家庭環境にあったことは認められるべきかもしれない。

(42) VirchowをBoasの"a model of his [Boas'] own scientific activity"（Stocking, 1968；p.280）とする見解は，Boasの著作の分析からは妥当だろうが，Virchowを過小評価していると筆者は考える。

(43) 移民人口の形態的可変性の強調（Goldstein, 1981；p.492, Leaf, 1970；p.200）は，人種主義的遺伝主義を否定したVirchowのユダヤ系学童の形質的研究の延長線上にある。Boasの可変性理論には，変化の絶対量が小さすぎるとの批判が多い。BoasはここでもVirchow的結論を急ぐあまり，正確な判断からやや踏み出した印象を与える。

(44) 一般向けの雑誌掲載記事，新聞への投書，ラジオでの講演など（Goldstein, 1948；p.151）が

Virchow の社会教育活動（佐々木，1991；p.50，p.52（11））と共通する。

(45) 本文にみるようにナチス時代を除けば，Boas の反セム主義に対する言論活動はそれほど活発ではないが，Virchow と同様に，リベラリズムを背景として（Stocking，1968；p.149）反セム主義と戦った（Service，1985；p.149）とするのは全体的評価としては正しい。

(46) Virchow は第二帝政期の最も重要な自由主義者であり，最も戦闘的な反・反セム主義者だったから，自由主義的ユダヤ系市民だった Boas 周辺の人々の尊敬の対象だったことは容易に想像できる。その他にも Virchow が Stöcker とならんで Minden の隣の選挙区から立候補していた（Glick，1982；p.551）ことも，Boas が Virchow を身近に感じた理由だったかもしれない。

(47) Boas の代表的な民族調査である Kwakiutl 研究が事実上協力者 G. Hunt の英語記録に全面的に依拠し，Boas が言語習得を伴なう intensive field work をしなかった（Canizzo，1983）ことは現在ではよく知られた事実であり，Boas が学んだのは Virchow の「姿勢」にすぎないといえよう。ただ，言語学者の家庭に育った Malinowski と同水準の言語習得を Boas に望むのはやや不合理であり，北西海岸の本格的調査開始時の Boas の年齢は言語習得にはやや高すぎ，また使用言語の異なる数人口を調査対象にしたから，言語習得を伴なう民族誌調査をしなかったのは，条件を考えれば当然である。その Boas が他方で，時代的制約から科学的とはいいがたいのは事実だが，それなりの成果を上げた L. H. Morgan の業績の言語習得を前提にした部分を特に評価しなかったことを考えれば，Boas が考えていた文化人類学的な Virchow 風の事実発見的民族誌調査が，ドイツ民族学に多い博物館展示物収集型（佐々木，1991；p.51）にやや近く，intensive な民族誌調査との間には相当の距離があることを認めるべきである。

(48) 社会進化論を全面否定すれば，社会の進歩とともに反セム主義も消滅すると考えるユダヤ系知識人の未来像（Cohen，1979；pp.204・205）を否定することなり，全面的に肯定すれば後から出現したキリスト教がユダヤ教よりすぐれていることを認めなくてはならないからである。

(49) 合衆国中産階級の（創世記）宗教指向（Cohen，1979；p.194），進化論教育を非合法とする fundamentalistic な時代背景（猿谷，1981；p.45，1982；p.85）はもっと重視されるべきである。

(50) "Hyphened American"の多かった形成期の文化人類学者には社会思想的な制約が大きかったことをもっと強調すべきだろう。たとえば，移民でもあった彼等が拡散論を主張すれば，彼等自らが母国の文化を合衆国に移植する意図があるとみなされ，同化を拒否する傾向があると考えられがちであったことは，historical particularism の形成と全然無関係ではないはずだ。

(51) 現時点でふりかえれば Boas 自身の研究上の業績は政策的影響等にくらべればはるかに小さく，現代の社会科学の創始者達と Boas を並置する（Allen，1989；p.82）のには多少の抵抗がある。

文 献 目 録

Abe, G. 1988 "Professionalization pf American Anthropology and Franz Boas"『広島大学総合科学部紀要Ⅴ　言語文化研究』14　pp.53—68

阿部　斉　他編　1982『世紀転換期のアメリカ』東京大学出版会

Allen, J. S. 1989 "Franz Boas's Physical Anthropology: the Critique of Racial Formalism Revisited" *Current Anthropology* 30 pp.79—84

有賀　弘　1982「アメリカ社会の発展と宗教」阿部他編　pp.26—90

Bondar, J. 1985 *The Transplanted : a History of Immigrants in Urban America* Indiana University Press, Bloomington

Cannizo, J. 1983 "George Hunt and the invention of Kwakiutl Culture" *Canadian Review of Sociology and Anthropology* 20 pp.44—58

Chalmers, D. M. 1967 *Hooded Americanism : the First Centry of the Ku Klux Klan* Doubleday and Co. Inc., N. Y.

Cohen, N. W. 1979 "Antisemitism in the Gilded Age: the Jewish View" *Jewish Social Studies* 41 pp.187—210

Coser, L. A. 1985 *Refugee Scholars in America : thier Impact and their Experinces* Yale University Press, New Haven and London

Cruse, H. 1987 *Plural but Equal : a Critical Study of Blacks and Minotities and America's Plural Society* Williaw Morrow and Co. Inc., N. Y.

Dobkowski, M. N. 1979 *The Tarnished Dream : the Basis of American Anti-Semitism* Greenwood Press, Westport, Conneticut

Feuer, L. S. 198 "Frankfuhrt Marxists and the Columbia Liberals" *Survey* 25 pp.156—176

Frank, D. 1985 "Housewives, Socialists, and the Politics of Food: the 1917 N. Y. Cost-of-Living Protests "*Feminist Studies* 11 pp.255—285

Freed, S. A., and. 1988 "Capitalist Philanthropy and Russian Revolutionaries: the Jessup North Pacific Expedition (1897-1902)" *American Anthropolgist* 90 pp.7—24

Goldstein, M. S. 1948 "Franz Boas' Contributions to Physical Anthropology" *American Journal of Physical Anthropology* 6 pp.143—162

——— 1981 "Franz Boas, 1858-1942"*ibid*. 56 pp.491—493

Glick, L. B. 1982 "Types Distinct from our own: Franz Boas on Jewish Identity and Assimliation" *American Anthropologist* 84 pp.545—565

Harris, M. 1969 *The Rise of Anthropoligical Theory* London, Routledge and Kaegan Paul

本間　長世　1978「アメリカ文化史における1920年代-ヴィクトリア文化への挑戦」『アメリカ研究』12　pp.11—28

——— 1988「アメリカ文化の変容」本間編　pp.3—26

本間　長世　編　1988『現代アメリカの出現』東京大学出版会

岩野　一郎　1982「都市政治と移民」阿部他編　pp.91—128

——— 1988「新移民の「同化」と教育」本間編　pp.71—92

Jackson, K. T. 1967 *The Ku Klux Klan in the City 1915-1930* Oxford University Press

Kessner, T. 1977 *The Golden Door : Italian and Jewish Immigant Mobility in New York City 1880-1915* Cambridge University Press

Leaf, M. J. 1979 *Man, Mind and Science : a History of Anthropology* Columbia University Press, N. Y.

Lerner, R. 1989 "Marginality and Liberalism among Jewish Elites" *Public Opinion Quartery* 53 pp.330—352

益子　待也　1985「ボアズ——近代アメリカ人類学の父」綾部恒雄編『文化人類学群像1〈外国編1〉』京都アカデミア出版会　pp.84—99

松田　武　1985「クー・クラックス・クランと市民的自由」今津晃他編『市民的自由の研究』京都　世界思想社　pp.37—82

森田　三郎　1987「パパ・フランツのアメリカン・ドリーム」『甲南大学紀要（文学編）』67 pp.94—119

Remmers, H. H., and W. F. Wood 1988 "Changes in Attitudes toward Germans, Japanese, Jews and Nazis" Bergmann, W. ed., *Error without Trial : Psychological Research in Antisemitism* Walter de Gruyter, Berlin and N. Y. pp.400—408

Ross, E. B. 1985 "The "Deceptively Simple" Racism of Clark Wissler" *American Anthropologist* 89 pp.390—393

猿谷　要　1981「都市の思想とその相剋」『思想』689　pp.35—45

———— 1982（2.26）「光芒の1920年代—20—ニューヨーク」『朝日ジャーナル』24(8)　pp.84—89

———— 1983（11月）「ユダヤ系アメリカ人の歴史」『別冊英語青年』　pp.18—21

笹井　悠子　1981「苦悩するドイツ系アメリカ人」今津　晃編『第一次大戦下のアメリカ』京都　柳原書店　pp.267—300

佐々木　明　1990「ユダヤ系文化人類学者と反セム主義」『(信州大学) 人文科学論集』24　pp.57—68

———— 1991「ドイツ文化人類学の「不毛化」と反セム主義（第二帝政期)」前掲誌　25 pp.47—55

佐藤　唯行　1985「アトランタにおけるユダヤ人社会の発展と反ユダヤ主義の形成」『西洋史学』140　pp.20—37

———— 1988「アメリカユダヤ人の世界——反ユダヤ主義の歴史的展開」『歴史学研究』584 pp.40—52

Schreuder, Y. 1989 "Labor Segmentation, Ethnic Division of Labor, and Residential Seggregation in American Cities in the Early Twentieth Century" *Professional Geographer* 41 pp.131—142

Service. E. R. 1985 *A Century of Controversy : Ethnological Issues from 1860 to 1960* Academic Press

Shaffer, R. 1987 "Jews, Reds, and Violtes: Anti-Semitism and Anti-Radicalism at New York University, 1917-1929" *Journal of Ethnic Studies* 15(2) pp.47—83

Shapiro, W. 1985 "Some Implications of Clark Wissler's Race Theory" *Mankind (Austrl.)* 15 pp.1—17

Sowell, T. 1981 *Ethnic America : a History* Basic Book, N. Y.

Steinberg, S. 1986 "The Rise of the Jewish Professional: Case Studies of Intergenerational Mobility"*Ethnic and Racial Studies* 9 pp.502—513

Stocking, G. W. 1968 *Race, Culture* and *Evolution : Essays in the History of Anthropology* The Free Press, N. Y.

———— 1978 *The Shaping of American Anthropology 1883-1911 : a Franz Boas Reader* Basic Book, N. Y.

Whitfield, S. J. 1980 "Imagination of Disaster: the Response of American Jewish Intelectuals to Totalitarianism" *Jewish Social Studies* 42 pp.1—20

山本英政　1986「1890年代のアメリカ合衆国と東南欧移民問題」『東海史学』21　pp.53—75